

マーケット概況（2022年1月）

1月の債券相場は、年末年始の海外市場で米国の金融政策正常化観測が強まったことを背景に売り先行で始まり、10年364回債の利回りは前年末比0.010%上昇の0.080%で取引を開始した。5日に公表された昨年12月開催の米国FOMC議事要旨の内容やFRB高官からの相次ぐタカ派的な発言により、3月の利上げ開始と年内の少なくとも3回の利上げ実施が確実視されたことも相場の重石となった。14日にはロイター通信が「日銀が物価目標達成前の利上げ開始について議論をしている」と報じ、日銀の金融政策修正の思惑が高まったことで相場は下げ幅を拡大した。しかし、18日の金融政策決定会合後に黒田総裁が利上げについて議論していることは全くないと否定すると、政策修正観測が後退して相場は反発した。24日にウクライナ情勢の緊迫化を受け世界的に株安が広がったことも買い材料となったが、25～26日実施の米国FOMCとパウエルFRB議長の会見により利上げペースの加速が意識され、相場は再度下落に転じた。月末にかけては、IMFが金利誘導目標を10年債より短い年限にシフトさせるのが一つの選択肢と指摘したことで日銀の政策修正への思惑が再燃し、31日に債券先物3月限は一時150円59銭まで下落し、10年新発365回債の利回りは一時2016年1月29日以来の水準となる0.185%まで上昇した後、0.170%で取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は、月初の入札では最高落札利回りが-0.10%台でスタートしたが、発行額が7,000億円増額の5兆円になったことや今後の増額観測を受け、月後半の入札では-0.08%台に上昇した。セカンダリー市場は-0.160%でスタートしたものの、入札にあわせて水準修正の流れとなり一時-0.092%まで上昇する場面もあったが、月後半には投資家需要に支えられ、3M1055回債は-0.100%で取引を終えた。6M、1Y金利は、利付国債の中短期ゾーンの金利上昇を受け、入札の最高落札利回りは前月の-0.10%台から-0.09%～-0.08%台に上昇した。セカンダリー市場での投資家需要は限定的で、6M1054回債は-0.097%、1Y1052回債は-0.099%で月内の取引を終えた。

<一般債市場>

10年地方債は国債カーブ+6.0bpとスプレッドが維持され、1月は銘柄数が限定的なことや国債金利の上昇により利率が上昇したことから需要は旺盛だった。5年地方債は前月比同利率の0.001%で決定し、スプレッド対比では前月比タイト化したものの需要の弱さには繋がらず順調に消化された。既発債は、金融政策の修正観測から国債金利がボラタイルになると先行き不透明感が醸成され一部の銘柄で水準調整が意識された。社債の発行額は、1月払込みの大型発行が限定的だったことや社債等買入オペの増額買入措置が年度末で終了すること等が影響し、月間4,940億円と前年同月比1,338億円減少した。SDGs債に関連した銘柄は多く、銘柄数では4割超、発行額では3割強がグリーンボンド等のラベル付きで起債された。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#365	0.100(5日)	0.095(5日)	0.185(31日)	0.170(31日)
#364	0.080(4日)	0.080(4日)	0.170(31日)	0.160(31日)
#354	-0.045(4日)	-0.045(4日)	0.020(18日)	0.000(25日)
#149-#150(5Y)	-0.070(4日)	-0.070(4日)	-0.010(27日)	-0.020(31日)
#178-#179(20Y)	0.480(4日)	0.480(4日)	0.570(31日)	0.560(31日)
#1045-#1054TDB(6M)	-0.105(6日)	-0.105(6日)	-0.087(24日)	-0.097(24日)
#1047-#1055TDB(3M)	-0.160(4日)	-0.160(4日)	-0.092(21日)	-0.100(31日)